



ヴィキングル・オラフソン ゴルトベルク  
VÍKINGUR ÓLAFSSON  
GOLDBERG VARIATIONS

バッハ: ゴルトベルク変奏曲 BWV988 (全曲)  
ヴィキングル・オラフソン (ピアノ)

# 「この作品を録音することは 25年来の夢だった」

「ゴルトベルク変奏曲は  
壮大な“オークの木”のようであり、  
壮大ではあるものの、どこか有機的で、  
生き生きとしていて、活気に満ちていて、  
その形は敏感で再生力があり、  
その葉は、  
形而上学的な時間を曲げる光合成によって、  
崇拜する者のために  
音楽的な酸素を絶え間なく生み出しています」

——— ヴィキングル・オラフソン ———

2023年秋、ニューアルバム「J.S. バッハ：ゴルトベルク変奏曲」リリース  
2023/24シーズンの世界ツアーでは全公演ゴルトベルク変奏曲を演奏

## ヴィキングル・オラフソン (ピアノ)

Víkingur Ólafsson, piano

アイスランド出身で、現在、最も注目されているアーティストのひとりであるピアニスト、ヴィキングル・オラフソンは、最高レベルの音楽性と先見性のあるプログラムを見事に融合させ、世界中の音楽ファンに深いインパクトを与え続けている。ドイツ・グラモフォンに録音した『フィリップ・グラス：ピアノ・ワークス』（2017）、『バッハ・カレイドスコープ』（2018）、『ドビュッシー&ラモール』（2020）、『モーツァルト&コンテンポラリーズ』（2021）、『フロム・アファー』（2022）は、聴衆と評論家の想像力を捉え、6億回以上のストリーム再生を誇っている。

2023年10月にドイツ・グラモフォンより最新盤『J.S. バッハ：ゴルトベルク変奏曲』のリリースを予定。また、2023/24 シーズンを通し、6大陸で同曲を演奏するゴルトベルク・ワールド・ツアーに1年を捧げる予定である。彼はこのバッハの大曲を、サウスバンク・センター（ロンドン）、カーネギーホール（ニューヨーク）、ウィーン・コンツェルトハウス、フィルハーモニー・ド・パリ、サントリーホール（東京）、トーンハレ（チューリッヒ）、ベルリン・フィルハーモニー、ブダペスト芸術宮殿、KKL ルツェルン、フランクフルト歌劇場等で披露する。

ヴィキングルは、オーパス・クラシック賞「インストゥルメント・オブ・ザ・イヤー」（2023）、オーパス・クラシック賞「ソロ・レコーディング・インストゥルメント」（2回）、CoScan's International Nordic Person of the Year (2023)、ロルフ・ショック賞（2022）、グラモフォン賞「アーティスト・オブ・ザ・イヤー」（2019）、BBC ミュージック・マガジン「年間最優秀アルバム賞」（2019）など世界各国で複数の賞を受賞。

彼の才能は舞台芸術のみならずテレビとラジオでいくつかの自作シリーズを発表しており、BBCラジオ4の主要な芸術番組「Front Row」で3ヶ月間アーティスト・イン・レジデンスを務め、レイキャビクのハルパ・コンサートホールからロックダウン中に生放送を行い、世界中の数百万人のリスナーに届けた。

<https://www.vikingurolafsson.com/>

（2023年7月現在）



©Markus Jans

今から5年前の2018年、ヴィキングル・オラフソンが初めて日本でバッハを弾いた夜の興奮は、今でもはっきりと覚えている。ヴィキングルは、さまざまな前奏曲やカンタータを曲の長短に関係なく調性の連関によって独自に配列し、それらの小品を曲間なしに繋げて演奏していった。すると、バッハという名の川のせせらぎ（ドイツ語でBach）が切れ目なく押し寄せる大海の波へと変わり、モダン・ピアノ演奏のあらゆるテクニックを詰め込んだ巨大な音の大伽藍が目の前に現れた。彼のバッハの演奏では、40分近いピアノの大作を一気呵成に聴き通すボリューム感と、万華鏡のように色とりどりに変化していく小品を味わっていく繊細な喜びが、何の矛盾もなく共存していた。わかりやすく言えば、ヴィキングルは《ゴルトベルク変奏曲》の音符を1音も弾くことなしに、《ゴルトベルク変奏曲》でしか味わえないと思われてきた醍醐味を見事に表現していたのである！

であるならば、実際に《ゴルトベルク変奏曲》を弾いたら、いったい何が起きるのだろうか。アリアと30の変奏からなるこの長大な変奏曲から、いったいどんなドラマを新たに見出し、それを表現していくのだろうか。数年前からヴィキングルが準備していた《ゴルトベルク変奏曲》全曲演奏について、これだけは確実に言える。おそらくそれは、我々にコペルニクスの転回を迫るような演奏、バッハという作曲家そのものや《ゴルトベルク変奏曲》という曲そのものの見方が完全に変わってしまうような演奏となるだろう。歴史的大事件を目撃する機会を、逃してはならない。

——— 前島秀国 (サウンド&ヴィジュアル・ライター) ———